



TITLE:

<Book Review>Frank C. Darling,
Thailand and the United States.
Public Affairs Press, Washington, D.
C., 1965,243p

AUTHOR(S):

本岡, 武

CITATION:

本岡, 武. <Book Review>Frank C. Darling, Thailand and the United States. Public Affairs Press, Washington, D. C., 1965,243p. 東南アジア研究 1965, 3(3): 200-201

ISSUE DATE:

1965-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55092>

RIGHT:

図書紹介

Office of the Prime Minister, Government of Thailand: *Thailand, Official Yearbook, 1964*. Government House Printing Office, Bangkok, 1965. 702 p.

タイにはこれまで、いくつかの商業出版物としての年鑑はあったが、このたび、はじめて政府出版物としての年鑑が、Phya Srivisar 大佐を委員長とする総理府編集委員会によって編集され、政府印刷局より刊行された。

これは、とくに政府活動を中心としての、タイ国最近の状態の公式報告ともいうべきものである。大判800ページ近い大部なもので、写真も豊富に挿入され、統計類も多い。その内容としては、つきの諸項目からなる。

- 1) タイの自然と歴史
- 2) タイの政治と行政
- 3) 外交
- 4) 国防
- 5) 社会厚生
- 6) 医療保険
- 7) 司法
- 8) 産業と経済開発
- 9) 貿易と金融財政
- 10) マス・メディア
- 11) 教育
- 12) 宗教
- 13) 芸術と文化
- 14) スポーツ
- 15) 観光

各項目は、それぞれ主管官庁によって担当執筆されているようである。したがって、それだけに統一性が乏しく、精粗まちまちである。また、一般のタイ入門書にみられるような主観的記述がなく、もっぱら政府報告としての無味乾燥なものである。(かならずしも客観的叙述とはいえないところがある。というのは、政府にとって不利なことは省かれ、逆にともすれば政

策の効果が大きく描きだされるきらいがあるからである。)

また、本書は年鑑とはいふものの、序文でことわっているように、毎年出版されるものでない。ここ当分、大きな変化のないかぎり、出版されないとのことである。

この意味で、本書は政府の年次報告でもない。政府版の「タイ国入門」といったらいちばん適切なのではないかと思う。その政府版という限界内で、叙述は比較的客観的であり、正確である。タイについてなんらかの研究をしようとする場合、まず一応読まれる必要がある。たとえばタイの教育を研究しようとするときには、本年鑑の教育の項目に目をとおすことが、最もてっとりばよい。こういった意味で、タイ研究に不可欠なものである。

しかも、これだけ大部なものが、わずか40パーツ(US\$2)で市販されている。政府刊行物なればこそである。

わたくしは、これだけまとまった英文の出版物を刊行するにいたったタイ国政府の調査行政能力にたいして、いまさらながら、心から敬意を表したい。

(本岡 武)

Frank C. Darling: *Thailand and the United States*. Public Affairs Press, Washington, D. C., 1965. 243 p.

本書にシカゴ大学 Hans J. Morgenthau 教授が序文をよせ、「学者による歴史の編集は政治家や大衆に現実の問題の根源を教えるものである」と強調し、ここにとりあつかわれるアメリカとタイとの関係史は、アメリカのタイにたいするこれからの政策のありかたに重要な価値があるという。

たしかに、本書はこうした意図のもとに書かれたようだ。著者 Frank C. Darling 博士は、ワシントンの American University で政治学の ph. D. をとったあと、チェラローンコーン大学とタマサート大学の

講師として3カ年バンコク滞在、ついで中央情報局にアジア問題の専門家として8年間在勤、1960年以来コロラド大学の政治学助教授をつとめている。

この著者の履歴は本書がきわめて現実的・政策的であることを示すであろう。つまり、本書はアメリカとタイの関係史とはいふものの、19世紀はじめから第2次世界大戦にいたる歴史にはたった1章「初期のアメリカ・タイ関係」がさかれているだけである。

本書は主として、アメリカとタイとの関係がきわめて密接となった第2次世界戦争終結後からサリット政権下にいたるまでの20年たらずの期間を対象とする。そして、この期間において、アメリカがタイにいかなる政策をうちだし、援助をおこなったか、それがタイにいかなる影響をあたえ、またタイがいかにこれに対応したかという問題をとりあつかう。

この間の経過を、豊富な文献、タイ・アメリカの双方の関係者とのインタビュー、さらに著者自身のバンコクならびにワシントンのICA在勤の経験にもとづいて、詳細に述べている。まことに、戦後の米・タイ関係史として出色のものだと思う。

しかし、その結論は、きわめて常識的だ。いわく、「アメリカはタイの国家保障をつよめた。アメリカの技術援助はタイの経済発展の刺激となった。アメリカの教育計画はタイの知識水準を高めることができた。しかし、軍事援助に重点をおいた結果、軍部がこの国の支配的な政治グループとなった。アメリカはかならずしも1951年以来の軍部独裁の条件を創出したのではない。これには、その他のタイの歴史的條件が作用している。しかし、アメリカのタイをして東南アジアの反共基地たらしめようとする政策のため、軍部は政治的・経済的問題により関与する結果となった。アメリカの軍事援助と狭量な戦闘的反共ミューニズムとが結びついて、（民主主義社会になければならない）政府反対活動を阻止しているのだ」と（P.214）。

わたくしは、こういった見解の書物が軍部独裁のバンコクで公然と販売されているのをおもしろいと思う。また、わたくしは、日本・タイの戦後の関係史、とくに日本がタイにいかなる影響を与えたかを主題とする研究がなされてほしいと、本書を読みながらつくづく痛感したしだいである。（本岡 武）

Eunice S. Matthew: *The Land and*

People of Thailand, J. B. Lippincott Company, Philadelphia and New York, 1964. 160 p.

世界的な観光ブームのため、アメリカやイギリスで、いくつかの外国事情紹介の国別シリーズが出版されている。ここに紹介する Matthew 女史の「タイの土地と人間」は、もう42冊を数えている Portraits of the Nations Series の1冊である。

もともと、わたくしは外国事情の案内書を読むのが好きだ。しかし、こうした新刊を紹介するのは、それ以上に、なんらかのテーマで外国を研究しようとする場合、その国の一般的知識をもっておくことが必要であるからである。（たとえば、その専攻とするところが自然科学であっても、「タイは回教国ですね」といった調子でタイへこられては、その研究がうまくゆくとは思われない。なぜなら、自然科学研究の場合でも、タイ人となんらかの形で協力が必要とされるからである。）

著者 Matthew 女史はコーネル大学で ph. D. をとり、アメリカの対外援助（Point IV program）が発足したときこれに参加、タイ国の教育省に5カ年間協力した。彼女は、この貢献のため、アメリカ国務省国際援助局より Citation of Meritorious Service を授与された。現在ニューヨークのブルックリン・カレッジ教育学部教授であり、国際比較教育を専攻している。

本書は彼女のタイ在勤の経験にもとづいたものであり、とりわけ彼女は農村における教育に努力しただけに、農村事情について、外国人としては珍しくくわしい。

本書の内容は、自由の国一ムアン・タイからはじまり、バンコクとタイの農村を説明する。しかし、本書のなかばがさかれ、またそれがこの本の特徴であるのは、これにつづくタイの歴史についてである。国王の物語、アユタヤにおける国王と外国人冒険者、アユタヤの陥落、シャムの再出発、キングモンクーとアンナ、チュラローンコーンと近代、シャムからタイランドへと、この歴史に7章があてられている。（バンコク王朝の200年たらずの歴史を一応知っておくことは、タイの近代化を理解するうえに、とくに重要である。）このあと、タイ人の性格、宗教、芸術などを述